

戦時下の文学へその三

安永武人

三 「皇民化」に抗して

——朝鮮の作家たち——

近代あるいは現代を対象としてあつた日本の文学史に、朝鮮人の作品がまったくといってよいほど、ふれられていないのはなぜだろうか。もちろん、朝鮮は他国であり、その他国の文学であつて、日本の文学ではないという形式的な判断があるからであらう。

しかし、いわゆる「日韓併合」らしい、日本帝国主義の鉄鎖のもとに呻吟し、日本人よりさらにおおきな屈辱と犠牲をしいられた朝鮮人民の苦痛をおもつとき、あるいは母国語をうばわれ朝鮮文字による表現を禁止された戦時下のきびしい状況と、そのことのために、日本語による表現に被支配民族としての痛恨をたくさねばならなかった作家たちの、生身をひきさかれるような苦悩をおもつとき、それはそう簡単にわりきられてよいだろうか。時期を戦時下にかぎって

みると、日鮮両人民は、戦争のもたらしたはかりしれない犠牲を共有したといえる。ところが、ながいあいだおおくの日本人は、かれらを侮蔑し奴隷あつかいにして優越感をたもち、そのことよつてかろうじてみずからの「臣民」の悲惨に耐えてきたこと、さらに根本的には日本人がその植民地的収奪の恩恵に浴してきたことなどを考えると、天皇制ファシズムの圧制のもとで被害者として共通の怨恨をもつとともに、加害者としての立場もあわせもつたことが想起されねばならないだろう。朝鮮人民のがわからずれば、搾取と差別の二重の桎梏を体験したことになる。かれらのその憎悪・悲憤が日本民族とのぬきさしならぬ関係のゆえにひきおこされ、その呪咀の対象が日本帝国主義であり、そのことがかなりの作品に日本語でかかれた事実、そういう作家のひとりである金史良の立場が「心からの反日主義であり、それをわれわれに隠さうとしなかった。日本人でも、話せば朝鮮人の気持は、わかる人はわかってくれる、——とい

「ふ心があった」^①と伝えられていることなども考えあわせると、その切ない願望や信頼にこたえなかった日本人の過去をとらえなおさねばならない。しかも、かれらの描いた朝鮮人の生活は、日本の支配ときりはなすことのできない現実であり、それにもかかわらず日本人のおおくとっては正確に認識されることのなかった日本歴史の恥部である。この部分は文学史にも数ページの落丁となっているのだが、その落丁をおきなうことは、日本の当時の文学、ひいては日本人の精神と行動をとらえるにあたって、おもいがけない光をなげかけるにちがいない。が、しかし、もしその数ページの欠落が、かつての支配民族としての優越意識の残存を意味しているのならば、いまのわたしたちにとってゆゆしい問題であるといわねばならない。

そうでないとしても、わたしたちは朝鮮について知らないことがおおすぎるようだ。たとえば日本の国会議事堂は「一九二〇年から三六年までかかって、延べ二五〇余万の労働者を動員して完成されたが、その大部分は朝鮮人の労力に負っている。中央の六五メートルの高所に、石を背負ってはいあがったのも朝鮮人であった。当然、多数の死傷者が出た」という事実を知っている人はすくないであろう。あるいは長野で「本土決戦にそなえて地下に大本営が掘られたが、この建設工事に使役された朝鮮人のうち数百名が行方不明

であることについて、機密防衛のために消されたのだと、関係者のあいだで噂されている」^②ことなど、これら一、二の事例をあげただけでも、自己の民族の過去に密着した歴史であるにもかかわらず、知らずにいるばあいがおおいのではあるまいか。朝鮮民族ほど、異民族でありながら、日本民族の生活にふかくかかわり、きつてもきれぬ関係をむすんだ民族はないであろう。それだけに、日本人、ことに戦時下の日本人の精神と行動のありようを問うばあい、この時期の朝鮮人作家が万斛のおもいをかたむけて、直接的にしろ間接的にしろ、わたしたち日本人によびかけた、あるいは弾劾し告発した文学を無視することはできないのである。

① 保高德蔵「純粋な金君」(「新日本文学」昭和二十七年十二月号)

② 塩田庄兵衛「『奪われた』ひとびと——戦時下の朝鮮人」(朝日ジャーナル編「昭和史の瞬間」(上所収)三四七頁。

1

日本帝國主義の侵略と植民地化によつてもたらされた朝鮮民族の屈辱と苦痛は、なにも一九一〇(明治四三)年のいわゆる「日韓併合」にはじまったわけではない。そのまえ、すでに日清戦争は朝鮮の独立保障を口実に朝鮮の国土と人民の生活を荒廢させたばかりで

なく、それ以後、日本の支配を確立する基礎をきまず、日露戦争の勃発直後、軍事力を背景とする強圧によって「日韓議定書」に調印させ、さらにその戦後には外交権の日本管理、統監府の設置など、「併合」にもちこむための日本がわの準備は着々と進行していた。そして「併合」という名の本格的な植民地化の開始によって、朝鮮民族のさまざまな苦悩は、日本の敗戦による解放まで、ながく決定的なものとなったのである。

「併合」に成功した日本は、総督府を設け初代総督に就任した寺内正毅陸軍大臣を中心に憲兵警察による力づくの統治をはじめた。「朝鮮人はわが法規に屈服するか、死か、そのいずれかを選ばねばならぬ」と寺内は豪語した^④。いわゆる「武断政治」である。

この武断政治の下では、朝鮮人の結社・政治的集会はもとより、屋外における多人数の集合まで禁止され、朝鮮文字の新聞の刊行は許されず、また朝鮮人の政治的発言の道は完全に抑えられた。軍人でない官吏や教員まで制服を着用し、腰に剣をさげ、専ら威圧によって朝鮮人を屈服させようとした^⑤。

しかし、もっとも根本的な朝鮮支配の政策としては「併合」直後から手をつけられ、九年の年月をついやして完成された土地調査事業があった。「土地所有権を明確にし、近代的な土地所有制度を確立すること」に日本資本主義進出の基盤をおこうとしたこの事業は、

期限内申告制をとったために「日本人の土地取得は保証されたが、大多数の農民は生活の基盤を奪い去られ」「莫大な貧民群」^⑦の流浪がはじまり、火田民が急激に増加するにいたった。この土地調査期間中の朝鮮人民の悲憤・反抗の余熱は、辛亥革命やロシア革命の影響、そして第一次世界大戦終結のあと民族自決の思想が世界的に普及していたなどの事情とからまって、ついに一九一九（大正八）年三月一日の独立宣言運動となって爆発した。日本人によって毒殺されたとうわさされていた国王の葬儀の日をまえに、全国から人びとが京城にあつまっていた条件もかさなり、「朝鮮独立万歳」のデモは朝鮮全土「二一八郡のうち二一一郡に直接的な蜂起」^⑧があり、「百万ないし二百万の民衆が直接参加」^⑨したと推定される、まさに全朝鮮民族をあげての日本帝国主義にたいするたたかいであった。そして京城街頭では「吾等はこちらにわが朝鮮の独立国であることと朝鮮人の自主民であることを宣言する」という独立宣言書がまかれたが、じつは、その一月たらずまえの二月八日に東京在住の朝鮮人留学生六〇〇余名がすでに独立宣言をおこなっていた。

今後正義と自由の民主主義の先進国家の模範にならってあたらしい国家を建設すれば、建国以来のわが文化と、正義と平和を愛してきたわが民族は、かならず世界平和と人類文化に貢献するであろう。ここにわが民族は、日本および世界各国にたいして自決

の実現を要求する。もしこれが意のとおりならないときは、わが民族は、民族の生存のために、自由行動によってわが民族の独立を達成せずにはおかないであろう。^⑭

という明快かつ激越なものだ。朝鮮全土をゆるがした独立運動——日本では「万歳事件」とよんだ——もさまざまな曲折をへて、結局武力鎮圧に屈服しなければならなかった。運動展開にあたって外国の援助があるだろうとあまり期待した弱点があったからだ。しかし、この巨大な運動のなかで、日本人憲兵・警官は殺されたが「一般市民の殺されたのはたった一人だけである」という「高い道義性」^⑮は、この運動の民族的性格を示すものとして注目しなければならぬ。

この日本帝国主義への反撃は、ついに日本に政策転換をよびなくさせ、ここに武断政治はおわりをつげた。「文化政治」にきりかえられ、総督武官制の廃止、憲兵警察から普通警察への移行、官吏・教員の制服帯剣の廃止、朝鮮文字の新聞発行、朝鮮人有力者の政治参与など、緩和政策がとられた。しかし、それはあくまで緩和、つまり懐柔であって、一九二三（大正一二）年の関東大震災ののち在日朝鮮人六千余名の大虐殺^⑯にもみられるように、日本の支配者たちの朝鮮人民にたいする恐怖と軽侮の念は本質的にはかわるものではなかった。が、ともかくこの統治方針の転換は、やがて「内鮮一

体化」という同化政策、すなわち朝鮮人の「皇国臣民化」政策を強行する発端となるものであり、これまでとちがって、おなじ民族のなかに日本帝国主義の協力者となる同胞をもたねばならぬという、あらたな苦悩を朝鮮民族がせおうもともなった。そしてこの苦悩は、おおくの民族的な作家たちを創作へかりたてるもだしがたい衝動となったのである。そのかん、一九二九（昭和四）年の元山労働者のゼネスト、同年の「日本帝国主義打倒」「植民地奴隷教育制度撤廃」などの要求をかかげた光州学生同盟休校は全国に波及し、翌年へかけての六月間に一九四校、五万人が参加する学生運動になったし、「賃金引き上げ、八時間労働制確立、朝鮮人、日本人差別待遇廃止などの要求」^⑰をかかげた労働争議が続発し、民族的抵抗の灯は消えさることがなかった。さらに日本帝国主義が朝鮮を後方兵站基地として中国侵略を開始する一九三一（昭和六）年から、全面的な日中戦争に突入した一九三七（昭和十二）年までのあいだ、たとえば一九三二年には中国・東北の間島省に拠点をもつ金日成の抗日武装パールチザン、ついで三四年には朝鮮人民革命軍の編成、三六年には「真正な朝鮮人民政府を樹立する」などの十六綱領をもつ「祖国光復会」による広汎な反日統一戦線の表現などによって、日本帝国主義はたえずその土台をゆきさぶられつつける。こういう経験から、日中戦争の勃発にいたって、かつての「武断政治」にもみら

れなかつた民族の魂そのものを骨ぬきにする政策が、反共対策を中軸として、いっそうぬきさしならぬ体制で強化されたのである。

まず「皇国臣民ノ誓詞」が一九三七(昭和十二)年にさだめられた。

一、私共ハ大日本帝国ノ臣民デアリマス。二、私共ハ心ヲ合セテ天皇陛下ニ忠義ヲ尽シマス。三、私共ハ忍苦鍛練シテ立派ナ強イ国民トナリマス。

「朝会、儀式及びその他凡ゆる機会に之を反復朗誦することにより児童生徒、一般民の胸奥に国民の信条を刻印せんことを目的」としたものであるという。心ある朝鮮人たちが、どういう気持でこれを「朗誦」したか、想像するだけでもたえがたいものがある。が、その翌年になると、志願兵制度の実施、皇国臣民体操や神社参拝の強制、朝鮮語新聞の廃刊、学校における朝鮮語の使用禁止など、いっそう反民族的な措置があいついで強行される。なかでも金在洙が小学校時代に体験した「朝鮮語を話した朝鮮人生徒を力まかせになぐったのは、朝鮮人の先生であり、友達が朝鮮語をしゃべったことを、手柄顔に先生につげたのも朝鮮人の生徒達であった」という場面は、当時の朝鮮民族の言語に絶するいたましい状況を象徴している。さらに翌三九(昭和十四)年には「創氏改名」、つまり「朝鮮人の姓名の日本式姓名への改称が半ば強制的に奨励され、姓名まで朝鮮の伝統を捨てることが要求された」^⑧のである。民族構成の根本要

件である地域・言語・経済・文化のすべてを奪いさり、その民族意識を抹殺することによって、戦時下日本の不足する労働力の補充として、あるいは戦線の兵士として、おもいのままに消耗したのだ。三八(昭和一三)年の国家総動員法、翌年の国民徴用令、四二年の徴兵制の被害をまともにうけ、太平洋戦争中、朝鮮での徴用四一五万、日本への強制連行七二万、軍人、軍属としての動員三六万といわれている^⑨。しかも戦後、戦犯にとわれて命を失ったもの二三名と^⑩いうにいたっては、いふべきことばを知らない。

こういう日本帝国主義の惨忍な支配下で、朝鮮民族の一員として文学の作家たちは、どのように生き、どういう文学を創造したのだろうか。

③ 金達寿「朝鮮」(岩波新書)一一三頁。なお「アメリカが日本にたいして調印させた安保条約とそっくりであった」として「議定書」の内容が紹介されている。

④ 前注におなじ。一一八頁。

⑤ 旗田巍「朝鮮史」(岩波全書)二〇三頁。

⑥ 細川嘉六「植民史」(東洋経済新報社「現代日本文明史」第十卷)二四八頁。

⑦ 注⑤におなじ。二〇五～二〇六頁。

⑧ 藤島宇内監修「朝鮮人」(日本読書新聞出版部)四八頁。

- ⑨ 石母田正「民族と歴史の発見」(東大出版会)二六二頁。
- ⑩ 注⑨におなじ。一二八頁。
- ⑪ 朝鮮民主主義人民共和国科学院歴史研究所編「朝鮮近代革命運動史」(新日本出版社)一九五頁。
- ⑫ 山辺健太郎「三・一運動について」(岩波「歴史学研究」一八四号)
- ⑬ 注⑤におなじ。二一〇〜二一一頁。
- ⑭ 「関東大震災と朝鮮人」(みず書房「現代史資料」6)
- ⑮ 注⑪におなじ。二七〇〜二七七頁。
- ⑯ 注③におなじ。一三六〜一三八頁。
- ⑰ 注⑥におなじ。三六七頁。
- ⑱ 注⑤におなじ。二二二頁。
- ⑲ 注③におなじ。九三頁。
- ⑳ 注⑤におなじ。二二二頁。「一九四〇年九月には創姓者は約一千六百万人、全人口の約八割に及んだ」という。
- ㉑ 注⑤におなじ。九五頁。
- ㉒ 注③におなじ。九七頁。

2

「日韓併合」の直前に開始された朝鮮言文一致運動の推進者であ

戦時下の文学人その三

った李光洙によって、朝鮮近代文学は黎明をむかえたとされてい
る。^②しかし、かれはトルストイ流の理想主義的人道主義にたち、し
たがって改良主義的思想のもちぬしであった。その後、三・一独立
運動の激発を契機として、表面的にしる武断政治の後退がみられ
「わずかではあるが朝鮮に自由がもたらされ、はじめて新文学も生
き生きと発展しはじめる」^③条件を獲得した。つまり朝鮮語で表現で
きるいささかの「自由」が文学活動に活力をもたらしたといえるで
あろう。そしてこの時期から金東仁らによる朝鮮自然主義文学が台
頭し、急速に成長しはじめる。が、これはやがて李光洙・金東仁ら
の「芸術的」傾向と、李箕永・韓雪野らの「社会主義的」^④傾向の二
系列にわかれるにいたる。そしてこの後者が中心となって一九二五
(昭和元)年、朝鮮プロレタリア芸術同盟(カップ)を結成するこ
とができた。その綱領に、

マルクス主義の歴史的必然性を正確に認識し、無産階級運動の
一部門である芸術運動をもって、封建的資本主義観念の徹底的排
撃、専制的勢力との抗争および意識層の養成運動の遂行を期する^⑤
という方針をにかけて、活潑な活動が展開され、そのなかで一九三
三(昭和八年)年に、こんにちもなお評価されている李箕永の「故郷」^⑥
がかかれた。しかし、その翌年にはカップ関係者二〇〇余名が検挙
され、李箕永も韓雪野も二年間の獄中生活をおくることになる。こ

のような日本の支配者の徹底的な弾圧に屈せず、一九三六（昭和十一年）年には、韓雪野の「黄昏」が「朝鮮日報」に連載されはじめた。

「これは、作者にとっても記念すべき最初の長篇であるばかりでなく、日本帝国主義の制圧下にあった時代の、朝鮮文学において李箕永の『故郷』と共に、朝鮮民族の不滅の勇氣と、叡智をうたい上げた、代表的な傑作となった」といわれている。

が、しかし、日本の侵略戦争が本格化するにつれて、朝鮮全土はふたたび武断政治時代よりもひどい暗黒の状態をむかえねばならなかった。「三八年の一カ年のあいだに四万四千余名の共産主義者と愛国的人民が検挙投獄された」し、「民族の言語が否定され、日本の戦争に協力する報国文学が要求され、ファシズムの非合理があらしとなって」きたのである。ここに朝鮮の作家たちは創作上もっとも困難な状況におこまれることになったが、日本の支配者と戦時色濃厚な日本文壇とに迎合屈服するところまで転落した張赫宙のような作家をのぞいて、なお、自由と解放をもとめて民族の良心の灯をみずからの胸にもやしつづけ、書きつづけた作家たちがいたのだ。三〇年代後半から四〇年代にかけて、あるいは母国語で、あるいは日本語で、かれらは書きつづけた。前者に李泰俊を、後者に金史良をあげることができる。現在、李泰俊は李箕永・韓雪野らとともに民主主義人民共和国にあり、金史良は戦時中、計画的に中国

派遣報道部員となって、延安に脱出、そこで朝鮮独立義勇軍に投じ、祖国解放の後、アメリカとの朝鮮戦争に従軍して戦死するという、まさに劇的生涯をおくった作家である。

しかし、ここで一九四九（昭和二四）年版の「解放前の在日文化運動概観」が指摘する問題にふれておかねばならない。

極度に制限された空気の中で、もし朝鮮人作家が日本語による文学のためにあらわれたとするならば、それは次のような二種類にわけてみることができであろう。すなわち一つは日本により日本文学を学ぶことを光栄と考え、日本語が近い将来において、世界における位置が拡大されることを確信した分子である。

そうしたかれらは読者層が狭く、また国語としての将来性が少ない朝鮮語による作品活動をやるよりも、むしろ日本語で日本作家として出発しようとするものであった。そしてもう一つは、朝鮮語で自由な空気の中で、辛ばうづよく作品活動をするのが作家の本分であろうが、一人ぐらい日本文壇において、日本の作家にまじり、植民地である朝鮮文壇よりも比較的寛大な日本文壇を通して、被圧迫民族である朝鮮人の現実を作品化し、そのことによって朝鮮民族ないし朝鮮文学を擁護する闘争を展開してもよろうとするものであった。(坪江訳)

そしてこの「在日文化運動概観」は転落の作家・張赫宙を前者に、

金史良を後者にあげている。だが、後者の方途をえらんだ作家たちのばあい、不自由な異国語によってあえて自己の真実を文学に結晶させようとしたのは、基本精神においては「概観」が叙述するとおりであったにちがひなかるうが、もっと具体的には、たとえば金史良の日本人との交友関係などからみても、かれに心ある日本人、ファシズムに苦しむ日本人民との連帯の可能性への期待があったことも

否めない事実であろう。むしろ、自国語の文学によって朝鮮民族の解放と自由への願望や勇気の喚起を期待するよりも、もはや日本語しか理解していない在日朝鮮人子弟とファシズムに苦しむ日本人民にたいする、日本語の文学による反帝闘争への誘いかけに期待がかけられたという側面があったとみるべきではあるまいか。治安維持法違反でとらえられた一朝鮮人がのこした「朝鮮の解放を期する事は日本の労働者、農民の解放を完成するに非ざれば望み得ざるものである。故に我々は其の必要手段として反帝国主義的要素との共同戦線、即日本の労働者、農民、解放運動者との提携闘争をなすものである」^⑳という供述がもっていた思想は、解放運動の政治的実行者たちばかりでなく、創作にたずさわる人たちにもちつつつけられてきた思想であったとみてよいであろう。金史良が日本人と朝鮮民族との接点として存在した存在日朝鮮人の問題を、執拗に追求しつづけている理由も、こういう思想に無縁でなかったと考えられるから

だ。そういうこともあって、これらの朝鮮文学を、日本の文学史とともにとらえねばならぬと考えるのである。

しかし、太平洋戦争にはいると、朝鮮語による作品はまず発表の場をとぎされてしまい、ついで日本語による作品も、張赫宙のように「報国文学」に挺身する作家をのぞけば、朝鮮人であるというだけで、これもまた表現の場があたえられなくなった。

数年の沈黙ののち、一九四五年八月一日、朝鮮人作家たちは、ようやく民族のことばと文字をつかう自由をとりかえすことができた。

⑲ 金達寿「朝鮮」(岩波新書)一八六頁。

⑳ 前注におなじ。一八七頁。

㉑ 前注におなじ。一八八頁。

⑳ 坪江汕二「改訂朝鮮民族独立運動秘史」(巖南堂)一六五頁。

㉑ 李殷直の日本訳で朝鮮文化社版・上下二巻がある。

⑳ 李殷直訳「黄昏」(朝鮮文化社)下巻「解説」三四五頁。

⑳ 朝鮮民主主義人民共和国科学院歴史研究所「朝鮮近代革命運動史」(新日本出版社)四〇〇頁。

⑳ 注⑳におなじ。一九二頁。

㉑ 任展慧「張赫宙論」(「文学」昭和四十年十一月号)

⑳ 注⑳におなじ。三七三頁。

③ 村山知義・間宮茂輔・保高德蔵などの「金史良追悼」記事

〔「新日本文学」昭和二十七年十二月号〕

④ 司法省刑事局「思想月報」第七号（昭和十年一月）五三頁。

3

韓雪野の「黄昏」は、一九三四（昭和九）年のカップねこそぎ検挙によって投獄されたかれが、二年間の牢獄生活中に構想したという。といっても「灯と紙と筆」が許されない獄中では「頭の中にかきこ」むほかはなかった。その創造の苦勞と心のはずみが「肉体的な健康上により影響をあたえ、精神上には希望と光明を与えてくれた」とみずから回想している。出獄すると病床にあってただちに執筆にかかり、「朝鮮日報」に連載しはじめたのである。が、日本当局の検閲はますます嚴重になる状況にあったから、創作上、あるいはそれともなうほかの配慮もとうぜん必要であった。

書きたいことをみな書くわけにいかず、また書くといっても、遠まわしのことを書くか、抽象的に描くほかなかった。ただ一つ有利だったことは、当時新聞に発表される文章は、全編を書いて事前に検閲をうけるのではなく、その日その日の新聞に発表されるものだけをもって、日帝の警察は検閲したために、これを利用して、危険だと思われるところにさしかかると、毎日毎日継続

して発表しないで、何日かずつとびとびに発表し、検閲者の記憶を、いくらかでも、ごまかしていくことができた。^⑤

これには当時の検閲の具体的な状況やその裏をかくことで自己の真実を読者につたえようとした作者の苦心がうかがわれるけれども、ここに語られていない、朝鮮語による表現の検閲上の得失という問題もあったはずである。「皇国臣民化」政策をとって、日本語をおしつけた日本官憲にはすすんで朝鮮語を習得しようとするものはずくなかったであろうから、とうぜん、これらの検閲も日本語訳にもとづいておこなわれたばあいがおおかつたであろう。そうすれば訳者の心証が、朝鮮民族への同情と反感とのいずれにあるかによって、訳文に微妙なちがいがでてきたであろうし、それがまた検閲の結果にもひびいたはずである。作者のほうからすれば、韓雪野のような周到な用意をもってしても、日本の支配にたいする反抗・民族解放の底意を抱懐するかぎり、訳者の立場のいかににかかわる、作者にはどうすることもできない一種の賭けをしなければならなかったわけだ。そのような創作と発表における不利な条件をくぐりぬけ、さらにカップ弾圧のあと、ひきつづきその方針を基本的に踏襲するという危険をおかしながら書かれたのが、この長篇「黄昏」であった。その発表は日本が中国への全面的侵略戦争を開始した一九三七（昭和十二）年の前年であり、朝鮮全土がその侵略をさ

さるる後方兵站基地として資源・労働力のみならず、人民の生命までも収奪される、それからの十年ちかい過程がほぼ準備を完了した時期にあたっている。

この作品は紡績工場の前社長・金在堂の邸における、その長男・金京才と異母弟妹の家庭教師である朴麗順との交渉からはじまる。

前半では、金京才とかれの婚約者で工場の現社長・安重瑞の娘・安顯玉と麗順との三人の心理的もつれあいや経済的利害関係の錯綜があたかも作品の主軸であるかのように展開される。しかし、よみすすむにつれて作者のほんとうの関心が安社長の君臨する紡績工場にはたらく労働者たちの連帯と行動にそそがれていることが、やがてはつきりしてくる。つまり若い労働者・俊植を中心とする終範、鶴洙、炯哲、鳳丸などの男性グループ、福述、粉姫などの女性グループ、それに一匹狼の正義派・東弼、女工をやめて金銭のために転落する貞任などがからみ、これらの労働者たちが社長の推進する工場合理化の攻勢に反対して動きはじめるたたかいが、作者のほんとうに描きたかった主題であった。しかも、前半のこじれた恋愛関係から麗順が脱出し、労働者のグループに接近するようになり、ついにその仲間いりをするという展開とそのあいだにおけるかの女の苦悩にみちた自己変革の過程と一匹狼・東弼の変化とが、この作品を類

型的なストライキものにおちいらせず、いきいきとしたおもしろさをもった作品にしている。

麗順は弟をひとりもつ農村出身のますしい娘であり、高等普通学校（中学校）に通学しながら家庭教師をしていたが、京才の継母との感情的対立から、そこを去り、京才の世話で安社長の秘書になる。が、ここもかの女が安心して勤められる職場ではなかった。社長のかの女にたいする野望がどすくろくうずまいていたからだ。そして社長の未遂行為がかの女の辞意をかためさせるが、なかなか決定的にはならない。こういうとき、かの女をとらえるのは故郷であった。故郷に帰れば、なにかよいことがありそうな気がするのだ。

かの女の甘いこの故郷へのおもいも「実際は、京才との関係をもつすこし、おだやかなところで生かしてみたいという潜在意識からくるものかもしれない」とし、そして「自分で自分の希望を実行してみることば、京才がそれに同調するかしないかを試してみる、よい機会になるだろう」という、まことに女くさいおもわくもふくまれていて、京才への未練と打算がかの女をとらえている。しかし、農村で教師でもしてみようという自分につごうのよい状況判断は、かつての故郷での同窓生・俊植の「小学校の教員だつたやすくなれると思つていのですか」という一言で、たちどころに現実のきびしさに直面させられてしまつ。動揺した麗順は志望をこんど

は女子工員にふりかえるが、俊植はもっと根本的な問題として「人間は誰でも自分が、まごころで生きていきながら、自分と手をにぎっていかれる人たちが誰であるか」「住みよい隣人となれる人は誰かを、しっかりとつかんで、そこへいくべきだ」といいきかせる。この忠告は「一個の弱い人間が、いつも世間にだまされて、世間の陰しい波におされて生きていような気がし」ている麗順にとって、とうぜんの、そして痛烈な批判にもなっていたのだ。そしてかれは「いまの麗順の考え方では、工場の仕事をやりぬくのは難しいと考えた。肉体的にもそうであるが、第一精神的にも、その仕事に自身を融和させるところまで、麗順は到達してない」と判断し、「工場にはいつてきたかったら、先ず周囲の空気を一新させなくてはならない」「そしてその時にこそ麗順さんの真実の生活がはじまる」「すべてのことは生活から出発する」と断言する。麗順は観念的に工場や労働者を理解していたのだが、ここで生活のしかた、ものの考えかたすべてを抜本的に刷新しなければならぬところにいると自覚はするが、とくに京才との関係はそうかんたんに清算できる問題ではない。俊植の批判にあらがいがたい思いをした直後、下宿にかえて京才の置き手紙をみるとまた「綿々とした愛着の念が、徐々に甦って」くるといった動揺をくりかえす。俊植と京才とのそれぞれの牽引力に感応しながら、当分かの女の精神はゆらぎつ

づける。かの女はやがて現場の女子工員になるが、それまでかなりの心理的な動揺と曲折をへなければならなかった。

ところで、いっぽう労働者たちは、仲間の鶴沫が事故で負傷したのをきっかけに、職制の冷酷非情なものの考えかたや処置をはねかえして、鶴沫の入院加療を実現させることができた。しかし、かれらの力は、組織されたそれというより、むしろ個人的な力量によるものといふべきであって、とくに東弼と俊植の力がものをいった。ただこの事件のかれらにとっての収穫は、それまでたがいに反目しあっていた東弼と俊植とが、俊植が東弼を再評価する自制的なゆとりをもつにいたったことよって好転したことであろう。「東弼にも、同じ立場のものをいたわり、わがことのように痛さを感じる尊い血が残っている」ことに俊植がよく感動したからである。この二人のあたらしい関係は、この労働者たちに、眼にみえないかれらのつながりの核になるものをもたらそうとしていた。が、それはまだ俊植たちの仲間に東弼がはいったというのではなく、二人の感情のしこりが、すこしとけたという程度のものであった。しかし、襲いかかる経済恐慌の風を背景に、安田財閥や鐘紡の朝鮮進出によって、ちいさな民族資本の脆弱な基盤は、ひとたまりもなくゆらいでくる。安重瑞社長のばあいも例外ではなかった。安田財閥に追随するだけでなく、「産業合理化」を遂行しなければ、かれの個人財

産で経営する会社も倒産の憂き目をみなければならぬ。あたらしい工場に高性能の機械を設備して、人員整理を強行し、自己資本の安泰をはからねばならない。そのためには「合理化」計画を秘密裡にすすめるのと並行して、労働者のなかに会社支持の勢力を育てておかないと、計画が実行段階にうつったときに危険である。そこで会社側がだきこみをはかったのが、麗順と東弼である。麗順には社長が、女工の担当に昇格させるために人事課にポストを用意して現場からはなれることを勧誘し、女子工員の中心になって組織してくれるようにたのむ。東弼には、かれが一匹狼的存在であり、しかも労働者に人望のあることに眼をつけた工場長が、親睦会の組織化を依頼する。が、東弼は能力がないことを理由にことわるが、ほんとうは、俊植の仲間の炯哲の感化で「心境にすくなくならぬ変化を来していた」。「若い人たちの発展にくらべて、自分がおくれているということをお覚するようになった。それで、ひそかに、彼等から、おくれてはならないということ、そうするには、結局、彼等と手を握らなければならぬ」と考えるようになっていたからであった。工場長はかれの辞退を遠慮だとうけとって楽観した。麗順のはいっそうはっきりした拒絶であった。社長が女子工員たちに麗順を社長直系だとおもひこませ、かの女にちかづくほうが身のためだと考えさせることで、かの女中心の結集を実現させようとし、あわせてかの女

から労働者のなかの「悪いやつら」の情報を提供させようと甘言をもって誘うのにたいして「上の人にぶら下って生きようとするよりは、かえて自分の体と、同僚とを、余計信じている」「みな誠実に仕事をしていますから、何も動静をさぐる必要もなく、また別に党派をつくる理由もありません」としりぞける。社長はそれでも昇給を条件に説得しようとするが、かの女はたくみにことわる。が、この談合で、かの女は社長の不用意な発言のなかに人員整理の計画のあることを確認することができた。

会社側の攻勢の第一歩は、すでにおためごかしの健康診断となつてあらわれてきていた。俊植たちの運動の発端は、この健康診断が、会社が宣伝しているように労働者の健康維持のためではなくて、やがて断行する人員整理の資料のひとつであることを、ひろく工場内に周知徹底させることにあつた。そのためには、あらゆる機会がとらえられて、啓蒙活動が展開されていた。ところが、この合理化反対のたたかひにひとつの障害がでてきた。それは東弼が「新しい機械をすえつけ、保健施設と健康診断を実施することは、労働者に有利だ」「たとえそのような方法で、労働者を整理しようとしたとしても、先ず有利なことは支障のないようにしてやり、その次にくることにはいしては、その時になってやるべきで、はやくからせつづくことはない」という主張をまげなかつたからである。東弼の影響

力からみて、これは俊植たちにとって放置できない意見であり、か
れにたいする警戒がはじまる。が、事態の経過のなかで東弼が俊植
たちを「自分にたいする労働者たちの信任を奪っていくのと同じ時
に、自分を排除しようとして、策動しているのだ」と解釈したため
に労働者の運動の中心部に対立を生じてしまった。かれが工場長に
よばれたということも、俊植たちの警戒をいつそうつよめさせるこ
とになった。

麗順は麗順で労働者になりきろうとする努力をかさねていた。京
才とのあいだも「結ぶあてのない愛慾の絆をたちきろう」といくど
も決意したにもかかわらず、やはり動揺をくりかえしている。しか
し、工場仲間たちと労働をともにするなかで、かの女はしだいに
労働者としての自己にめざめてくる。社長の奸計、京才と別れさせ
ようとするその父の強圧的な態度などから学んだところもおおきか
ったし、とくに俊植との接触はその意味で重要な影響をおよぼすこ
とになる。

京才に逢ってから、彼女の心境には、別に変動がなかった。勿
論、ありきたりの男とみるには、まだ、あまりにも、記憶がなま
なましかったが、麗順は、そんなに大きく氣遣うことなく、京才
に、平気で対することができた。（中略）話が昔のことにもどっ
ていくのを、麗順も全然のぞまないわけではなかったが、それは

すでに現在の生活に得にならないことなので、出来るかぎり、そ
の昔とは因縁の遠い、今日の話にばかり終始したのだった。京才
の憔悴した顔が、異常に、気にかかりもしたが、麗順は、もう、
そんなことにも、なるべく気をつかうまいとしていた。麗順は、京
才とわかれて、工場にかえっていく間、情にひかされる重苦しさ
がなくなり、意志で歩いていく軽快さがましていくのを感じた。

麗順が職場にはいつていくや、何処から何時あらわれたのか、
福述と粉姫がとんできた。彼女たちのわけもなくうれしがり、息
をはずませている顔を見た瞬間、麗順は、この人たちこそ、真正な
自分の仲間だと思った。麗順はいつか、俊植が、人間は自分で自分
の世界をつくらなければならないといっていたことを回想した。
こうして麗順も、緊迫する闘争に参加してゆく。

闘争は東弼の会社の政策にたいする見解と俊植グループへの誤解
によって、ひとつの困難に逢着していたが、俊植を中心として結集
していた労働者たちが、会社にたいして先手をうって要求をたたき
つけるという、その最終の準備段階にいたって、どうしても東弼と
俊植たちとのただしい和解が必要になっていた。俊植のほうにはす
でに「鶴塚が負傷した時だとか、その後回もそれに似た事がおこ
った時にも、東弼は、平素の傍観的な態度を捨てて、一翼をになおう
という誠意をみせたことがあるのに」「せいせい人道主義的傾向だ

といつて、大したことのないように評価してしまつた」という反省がでていたけれども、東弼してみれば、俊植グループにたえず監視されていると判断して腹にすえかねていたので。とうぜん決定的な対決の場面が到来する。いきおい感情的なことは東弼の口をついてでる。

「幾人もの野郎共がくみをつくつてから、弱い者、みよりのない者、善良な者、おろかな者を、わらくずのように、除けものにしてしまうのが、お前らのいう『運動』なのか」「自分らの意見に附和雷同する群だけを近よせ、その他の者には、むやみに黒い荷札をつけるのが、いわゆるお前らの団結というものか」「本当の仕事をしようとする誠意があつて、さらに大きな問題が鼻の先におぶつかつてみる。お前らのように、仲間同志喰いちぎつていられるか」

これにたいして俊植はなかなか答えようとしなが、かれ一流の理論をいいつのる東弼に「まだ真情と良心」を俊植はみとめる余裕があつた。

「他の道を歩いている人間は、おれたちの仲間ではないのだ」「お前が今のよくなその態度を直さない以上、俺たちの味方ではないというんだよ」「今日までのお前の行動を反省してみろというのだ。俺たちがお前を捨てたか、お前が俺たちを捨てたのか、

考えてみる。それでも、今日までも、俺たちは期待をもつていた。しかし、お前は最後まで、わくの外で、ぬけることばかり考へて、その上、会社から、秘密の交渉をうけていながら、俺たちに一言も話をしないじゃないか？ それで一体、お前を信ずることができるか？」

俊植はこれだけのことをいうあいだに東弼に殴られるが、なおひるまない。「お前がお前独りで、お前の心の中にどんなすばらしい考へをもつていたからつて、それが俺たちに何の役に立つのだ？」という一言は、東弼のいちばん痛いところをついた。東弼は憤然として捨てぜりふをのこして席をたとうとするが、俊植ははなさない。

「お前の同志として、お前をつかまえておく権利があるんだ」「いま、どういう時だと思ふのだ。仲間たちの仕事のために、俺たちは皆で、お前を待っているんだ。輝かしい闘士であつたお前を待っているんだぞ」

東弼もついに俊植の手をにぎる。闘争の最大の難関が、これで克服され、労働者の会社にたいする諸要求——解雇絶対反対・労働時間短縮・賃金ひきあげ・治療費支出など——が、ひそかにまとめられ、会社の意表をついて社長につきつけられる。会社を私有物としかおもわず、しかも材料費の騰貴と生産費引きさげの重圧をせおつている安社長は、労働者の要求によつて苦境にたたされ、激怒する

が、かねて賄賂でまるめこんでいる日本人の警察署長・高橋に助力をたのむくらい知恵しかうかばない。俊植・東弼・麗順を先頭におしにかけてきている労働者に圧倒されて、それでも言を左右にして慰撫につとめるが、社長や会社幹部の甘言にまどわされないかれらは、会社がわの拒絶を確認して、従業員大会で「一切の仕事からはなれることを宣言」する。やがて兇暴な警察が乱入してくるだろうことが予想される状況のなかで、労働者たちが工場に籠城することを決定するところで、この小説はおわっている。この労使の決定的段階にいたっても、労使協調をしか説くことのできなかつた京才は、そのことによって、もはや麗順とまったく異なる世界の人間であることを身をもって立証しなければならなかつた。

自分にくらべて、彼等の存在は、あまりにも大きく鮮明のような気がした。この時ほど、京才は暗くなっていく黄昏に、とけこんでいってしまう自分自身をはっきり見出したことは、かつてなかつた。この作品の題名の由来も、ここにあつた。

作者・韓雪野がこの長篇小説で、もっとも力をこめて描きたかつたのは、俊植を中心とする工場労働者の階級意識にめざめ組織を拡大強化してゆく過程と闘争であつたことは、かれがカップの方針にしたがつて創作活動をつづけてきたとみずから語っていることによ

つてもあきらかである。ところが、そのかんじんの俊植が、いきいきと形象化されていないのはなぜだろうか。それとは逆に、京才や麗順はじつに克明に描きだされている。訳者・李殷直は、作品の発端が京才と麗順の恋愛からはじまる理由を、「このように筋を展開することによって、作者は、たくみに日帝の検閲の眼をかすめた。

美男美女の恋愛物語は、彼等の好むところであるからである」と説明している。たしかに、そういう事情や配慮もあつたにちがいない。しかし、こんにち、よんでみて、作品の三分の二ちかくまで、

この二人の心理的葛藤が表面的にしる主軸をなしている構成は、俊植たちの活動が主調になっているよりは、いっそう作者の眞の意図を読者につたえるのに効果をあげているという実感を否定することができない。そして、麗順が俊植たちの活動に自己を結びつけてゆく具体的な過程を克明に描くことによって、俊植たちの非合法的で隠微な、どこまで広がりをもっているかわからぬ活動のぶきみさとそれへの期待をつよめるのに有効であつたといえるからである。当時の朝鮮人読者は、俊植たちの動きの背後に、その描かれていない部分に巨大な動きを想像し、力づけられ期待をもつことができたのではあるまいか。この作品に描かれた時代背景をものがたる唯一の事件は、イタリーのエチオピア侵略——一九三五（昭和十）年——であるから、かれがカップの総検挙にあつて獄中であつた時期を作

品にとりいれたことになる。左翼弾圧のもっとも集中的に強行された時期を設定して、もし俊植たちの活動を中心にすえて、それをまともに描こうとしたならば、検閲上それが不可能であったといふばかりでなく、現実の活動が、ほとんど崩壊にちかい状況のなかで、それがリアリティをもちうるまでに文学化することは、困難な作業であったにちがいないと想像されるからである。つまり、現実の状況からみて、いきおい観念化されざるをえず、追真性とはほしい人物や運動の描写におちいる可能性のほうがおおきかったであろう。そう考えると、麗順の自己変革の過程が、強力な一本の軸となり、かの女のようなブチ・ブル的心情をもつ女性が、あの状況のもとで、俊植たちの運動と思想にちかづいてゆく必然性を描いたことは、事情はどうであれ、結果的にはこの作品の文学的共感を確保したといわねばならない。そのことは、安重瑞社長に代表される民族資本家の日本経済のなかでの位置、日本財閥との買弁的な関係などが、労働者との衝突を描くことで、間接的にうきばりにされてくる効果の問題とも関連している。日本帝国主義の支配を、それじたいとして正面からとりあげることがせず、安社長と俊植たち労働者との抗争を前面におしだして、日本の警察力に依存する安社長の反民族性をもあきらかに描きながら、しかも社長が労働者を弾圧せざるをえないところに追いまれていく状況として、日帝の経済的圧

迫をたくみにうかびあがらせているのは、読者にとって、この労使対立が階級闘争という意味をもつばかりでなく、日帝支配を背景とする民族的悲劇であるだけに、そのやりきれない悲痛さに媒介されて、その悲劇の根源をなしている日本の支配にたいする憎しみが明確な像となって心をとらえたであろう。したがって、韓雪野は、獄中でこの作品の構想をねりあげてゆくあいだ、つよく検閲の眼を意識することによって、日帝にたいする朝鮮民族としての屈辱と怒りにたかぶる感情を沈潜させ、しかもそれを強力な創作衝動としながら、一見、朝鮮人民の内部抗争をとりあげたようにみせかけて、じつは読者の感情が、実生活の体験とあいまって、日本帝国主義の支配にたいする憎悪にまで、いやおうなく組織されてゆく構成をとりえたということになる。朝鮮人ならば眼をそむけたくなるような同族内部の、日本の警察権力までかりての闘争、しかもそれが日帝の植民地朝鮮にたいする支配に起因することを描出できたのは、作者が検閲に用心ぶかくなることで、かえって創作にとってマイナスにはたらくその困難な現実的制約を、文学的にみごとに克服しうる力量をもっていたことを証明している。検閲の不自由さに拘束されたままにおわらず、むしろその不自由さを起点として逆にすぐれた構成と形象を獲得・定着しているといえるであろう。そして、それで検閲者の眼をたくみにそらしながら、じつは反資本主義、反日本帝

国主義という、朝鮮民族の解放にとって本来わかちがたいふたつの側面を、統一的に具象できたのである。こうみてくると、この作品のリアリズムは、カップの指針からの後退ではなくて、検閲という制約のなかで、きたえられ深化させられ、柔軟な現実再現を可能にしたリアリズムであり、それによってすぐれた文学性を獲得していることがみとめられなくてはならぬであらう。

ところで、麗順と東弼の形象は、どういう意味をもっているのだろうか。

麗順が貧困な境遇の女性であり、その苦境から京才や安社長の協力と好意にすがって脱出しようとはかったのは、強固な日帝支配下にある朝鮮で、ふつう誰もが求める安楽な自己救済の道であっただろう。そのかの女が、社長秘書から現場の工員になり、絶交宣言のあともなお京才への思慕をたちきれず、いっぽう俊植の感化や労働体験による労働者としての自覚もたかまり、その板ばさみになつて、ゆらぎつつづける心情は、それが直線的な変革の道すじでなく、ふつうの人間の煩惱にみちた自覚の過程であるだけに、一般読者の共感を獲得しやすかったのではなからうか。韓雪野が、俊植たちの労働者の生活と権利とをまもるたたかいよりも、京才と麗順との恋愛心理の葛藤の描写に、おおくの力をいれ、読者の眼をまずそこに集中させたことは、結果的には、おおくの朝鮮人読者に、朝鮮の現

実に眼をひらかせ、自分たちの民族のおかれている状況と、それを打破する方向がなんであるかを、文学の体験をとおして確信させるのに具体的に有効であったし、すくなくとも麗順の生を、かの女とともに生きてみることは、読者にとって自己変革への体験的確信をもたらしただけである。そういう変革過程のほうが、「思想的にも芸術的にも高い水準の作品ではなかった」^⑤カップ結成後数年間のそれよりも、いっそうふかくリアリティをもって、当時の朝鮮人民の魂をとらえたにちがいない。その麗順が苦境にみちた自己葛藤のすえに、京才の小市民的立場とは対立する立場にたつ自分であることを確認し、労働者としての人生をきりひらいてゆく出発点にたつまでの経緯が、もしこの作品にぬけているとしたら、もっと骨筋ばった闘争主義が表面にでてしまい、おもしろさをうしなってしまうであろう。麗順はだれがみても、平凡なありふれた朝鮮女性であり、それが労働とその環境によって、わずかずつ自己をつくりかえて、労働者としての立場にまで到達する経過が、文学的感動をもたらす形象として定着されている。そこにかの女の形象の意義をみとめたいし、作者のほうからいえば、麗順に象徴される朝鮮民族のせおわされている歴史の重任を、文学のなかで、もっとも困難な地点を出発点としてきりひらき、民族解放の方向をつくりだしたということになるであらう。

いっぽう東弼はどうか。東弼の頑固な自負は、いままでの孤立独立の闘争が、本来的な労働運動からみれば、あやまった方法であったにもかかわらず、いくたびか勝利した経験をもつことに起因している。しかし、それが、いわゆる経済主義的な闘争であって、政治性をおびなかつたゆえに、会社側が安心して譲歩したから手にいれることのできた勝利であったとは気づいていない。むしろ俊植たちが組織をひろげてゆくことにたいして、私党をくむものとして反発すら示すのだ。が、日本で勉強して帰ってきた炯哲との接触で、しだいに会社というものが東弼のとらえているようなものでないことを知りはじめ。強硬な態度でさええのぞめば、いつもひきさがるといふようななまやさしいものではなく、資本の存続そのものの基盤があやうくなる状況にいたると、いつでも犠牲を労働者に転嫁して自己をまもるものであることを、炯哲が筋みちをたてて説明してくれるたびに、かれの今までの自尊独歩の信念はゆらぎはじめ、労働者にとって組織というものがもつ意味・役割をしだいに理解し、ついに俊植との提携がなりたつ。もともと東弼は正義感がよく実行力もあり労働者のあいだに信望もあって、しかも組織軽侮の気持がつよいために、まかりまちがえば会社側に利用されることもおこりうる危険人物である。そういう人物をめぐって、会社がわと労働者がわのそれぞれの接触のしかたにちがいがあっておもしろい。だ

が、そのこととともに、こういう東弼のような存在は、当時の朝鮮においてどういう意味をもっていたのだろうか。韓雪野が、東弼のような孤立した闘士が俊植たちの組織に結びついてゆく過程を、東弼の激しやすい感情をもふくめて、無理なくつくりかえていった描写は適確であり、労働者のひとつのタイプを創造したといつてよい。労働運動、したがって朝鮮独立解放運動の途上、有能で活動を期待しうる人物でありながら、結局は日帝の走狗になりはてねばならなかった人物——文学の世界にかぎってみても張赫宙や金電洵がいる⁴⁰——のイメージが韓雪野にあって、その批判的な克服の作業が東弼の人物形象の創造となったとみることができるのである。みずみず敵の配下となつていった朝鮮人もすくなくなかったであろう。が、それはなんとしても奪回しなければならぬ人物たちであったはずだ。その奪回を文学的に遂行したのが東弼の創造であったとみないのである。そうみれば東弼創造は、韓雪野にとって、文学のなかでの文学の方法による階級闘争であり、ひいては民族解放闘争であったという意味をもつ。そこに韓雪野の虚構を必須条件とするリズムの質のたかさをみることができるといえる。

したがって、麗順と東弼の造型の成功が、この作品の価値を決定したといつてよい。が、作者は根本的にはそのような人間像を虚構という方法で創造しながら、いっぽうでは朝鮮民族の現実を直接的

に反映せずにはいられなかった。しかし、それには、細心の注意を必要とした。検閲の目をかわすために、作者は朝鮮民族の現状をみて奔騰する怒りや憎悪の感情を極度に抑制して抽象的に表現する方法をとっている。

頸玉からは、すでに時代の苦悶が消えてから久しい。東京にいる時、いくらかまねをしていたその殻までも、いまでは跡方もなくなった。すべての人々が、日に日に、息苦しさを増し、腹がへっていくことにたいして、頸玉は眼を向けようとしなかった。また今日の時代が要求している良心のひとかけらも、彼女からはともめ得べくもなかった。

ここにいう「時代の苦悶」「時代が要求している良心」とは、いうまでもなく日帝支配による朝鮮民族の「苦悶」であり、その圧制から解放と独立をかちとろうとする民族の「良心」である。「東京留学当時、志を同じくしていた親しい友人」「突然新聞にでてくる、小さくはあるが、あたらしい時代をしらせる噂が、自分を非難するよくな気もした」「彼はまだ時代の要求する良心と、その良心のよりどころとなる力とを捨て去ろうとはしなかった。意義のある生き方をし、力のある信念をもっていたという一つの衝動、そして青年らしい意気が、いくらか残っていた」などというとき、韓雪野の祖国独立への烈しいせつないおもいが、こういう抽象的な表現にこめ

られているとみてまちがいあるまい。

社会全体が大きな理想を喪失した、陰鬱な世代に属している人間は、ただ中間で、うろろろしている間に、自らの前途を闇の中に投げ捨ててしまう。

ここには、民族のおちいつている虚無の状態をも直視する作者のきびしい眼をみる事ができる。そしてこういう作者の民族把握を背景としたとき、麗順や東弼の労働者としての自覚が、たんにそれにとどまらないで、民族の一員としての自覚にもつながってゆくことを、朝鮮人読者はよみとることができたにちがいない。

このように、いっぽうにおいて抽象的な表現で検閲の目をかわしながら、「皇国臣民化」「内鮮一体」などというおもてむきのスローガンを逆手にとって、その「差別」を描きだしているところもある。硝子戸に石垣をめぐらした駐在所だけが、きわだってそびえ立ち、すべての家々をおさえつけているようにみえた……

日本人は巡查も商人も、われわれを自分たちより、愚かしい低い人間としかみないですよ……

朝鮮人は、なかなか社員にしませんからね……

こういう事実が周知の動かせぬ現実として存在するかぎり、さすがの検閲官も摘発するわけにはいかなかったであろうし、作者は支配者の痛いところを衝きながら、閃めきのように朝鮮のありのままの

姿を、かいまみせることができていた。

日本が大陸をのぞんで、武器をたくわえ、軍隊をふやす間に、世の中はまた戦争がおこるといつて騒ぎたて、軍需工業と時をおなじくして、消えていた釜山熱がまた頭をもたげはじめた……

一九三四、五（昭和九、十）年ごろの、日本の戦争経済政策の一環にくみこまれ、一時的にむかえた釜山景気に狂奔する民族資本家の醜態を批判的に描きだすとともに、日本の中国侵略前夜のぶきみな動きと、そのなかにまきこまれてゆく祖国朝鮮のゆがんだ姿をも、客観的にとらえることができたのである。

韓雪野をささえてきた思想は、朝鮮民族の解放と独立のほかになかったといっても過言ではあるまい。かれの父も民族運動に挺身し、かれ自身もまた中学生時代、三・一独立運動に参加して投獄された。かれはそういう自己を形成したのが家庭環境の影響とばかりはみないで「愛国的な伝統になった人民」の歴史に、そのふかい根源をもとめ、「一九一九年私が人民蜂起に加わったのは、すべての朝鮮人と同様、父や私の血の中に流れている伝統の力によるものだ」といい、さらに「日帝の強圧政策によって急激に促進された人民の生活の没落と階級の分化は、労働階級を急速に成長させ、やがて労働階級は、民族解放運動の主力として、民族の運命をになつて

立上った^①」という朝鮮の現実をもちつづけてきたのだ。それがかれの全人生、つまり行動と文学を規定してきた。「数千年の間」「外敵の侵略があるたびに、朝鮮の無力な支配層は、敵の前からひき退り、いつでも、人民たちが立ち上って敵を防いだ^②」という、その人民の立場に自己をおいて行動し、文学にとりくんだのであるから、一九〇〇年うまれのかれにとって日本帝国主義の打倒のほかに、自己を律する思想がなかったとしてもふしぎではないであろう。しかし、それが朝鮮の歴史にしばしば登場する固執的排外主義におちいらなかったのは、階級社会にたいするただししい認識があり、単純な排外主義では朝鮮民族の解放をかちとることができないことを熟知していたからである。民族の解放を熱望しながら、中心的には階級闘争を描くこの作品の方法は、こういうかれの思想、朝鮮の現実への認識に由来しているといわねばならない。「労働者たちの生活と、その闘争の中から、真実の朝鮮人の典型的な諸般の性格が具現するのを、私はみた。そこには朝鮮人の生活全般につながる、ありとあらゆる特徴があらわれていた。これが私の創作意欲をかりたてた^③」という、その「真実の朝鮮人の典型的な諸般の性格」とは、とうぜん民族の解放・祖国の独立という課題をにない、それを実現しうるすぐれた民族性についての把握であったはずだし、この作品の構成を決定する根本的認識であったはずである。こ

のかれの思想が、労働者の闘争を描いて、ほかならぬ民族解放を志向する文学としてこの作品を成立せしめたゆえんであるといえる。

それとともに、一九三六（昭和十一）年にこれが発表された意義は、朝鮮人民にとって、ますます日本帝国主義の対外侵略と圧制の苛酷さをくわえる時点であっただけに、たたかひの宣言であったといつてよい。その時点における日本では真実をまもるこれほどの文学的たたかひは放棄されていたのである。

③⑤ 韓雪野「解放後ハ黄昏Ⅴの再刊に際して」（朝鮮文化社「黄昏」上巻）三四四頁。

③⑥ 前注におなじ。三四五頁。

③⑦ 李殷直「解説」（「黄昏」下）三四三頁。

③⑧ 前注におなじ。三四九頁。

③⑨ 注③⑤におなじ。三四三頁。

④⑩ 金達寿「在日朝鮮人作家と作品」（「文学」昭和三十四年二月号）

④⑪ 韓雪野「ハ黄昏Ⅴ日本語訳出版に際して」（朝鮮文化社「黄昏」上巻）三頁。

④⑫ 前注におなじ。二頁。

④⑬ 前注におなじ。四頁。

4

韓雪野より四歳わかい李泰俊は、一九三〇年代から四〇年代はじめにかけて、かなり多数の短篇小説を書いている。その作品集「福徳房」^{④⑭}は、一九四〇（昭和十五）年に菊池寛によって制定され、菊池の真意にそったかどうかわからないが、その後、総督府によって牛耳られることになった朝鮮芸術賞の第二回受賞（その翌年）作品である。が、この集におさめられている作品には、おそらく総督府が授賞によって朝鮮人の歓心をかおうと意図したであろう政治的なねらいとはうらはらに、注意ぶかくよめば、日本の支配をけつしてころよくはうけいれていない、しずかに燃える怒りが「感性的な、洗煉された文章」^{④⑮}にひそんでいるのを発見する。

朝鮮人の暗い陰鬱な窮乏や放浪の生活が、そしてその救いのない生活のはてに訪れる悲しい死が描かれているのが、かれの文学のひとつの特徴といつてよいであろう。

「黄昏」よりまえに書かれた「不遇先生」（三二年）には、李泰俊の文学の特徴的人間像のひとつがすでにはっきりと描きだされている。一九一〇（明治四十三）年のいわゆる「日韓併合」時の民族的体験をもち、その後「志をえず」、家族をもちかえりみないで放浪の旅をつづけてはいるものの、鬱勃とした民族の魂はうしなっていない。

ない、そして若い世代にひそかに民族の未来を期待している眼光の鋭い老人の姿がそれである。「不遇先生」の主人公・宋老人はみずばらしい宿で相客の青年Hや李の好意によらなければ食事にもありつけぬ有様で、追いたてられてはいるけれども、いっこう気にもとめず、中国の愛国詩人・屈原の「漁夫辞を朗誦し、新聞社の幹部におさまっている旧友たちが「既に昔日の気魄を持た」ぬのを罵倒しながら、誰か金をだしてくれば「新聞を始めますじゃ。現に三つあるにはあるが、あれは新聞ではない、あんな新聞社など、百あつても物の役に立たぬ」と放言してはばからぬ老残の硬骨漢である。そのかれが「自分を本当に理解してくれる同志に出会さぬ」まま、電車にはねられて脳をやられる。そして心ならずも、軽蔑している旧友のなさけで病院にいられる。「その時はしみじみ羞かしく、このまま死んでも、と動ぜぬ積り」だったという屈辱感をいだきながら、けっきょく手術をうけて助かる。そして、かつて宿で世話になつた青年・李と邂逅する。

「……ところで、近頃、日支問題が大分採めている様子ですのう」「そうらしいですね、僕はしかし、その方面の事には暗いので……」
そう言うと、

「そんな筈はない、あんた見たいな意気勃々たる青年がじゃ……」
最近、とみに極東の風雲が険しいようじゃて……」

そう言いながら、不遇先生は、突然、去年の夏、信義旅館で始めて会つた時と同じように、炯々たる情熱に瞳を輝やかせ始めた。そしてまた放浪の旅をつづける宋老人のころにたぎるすさまじい民族的執念は、孤高と落魄のあわれさをにじませて描きだされている。それだけに同族の読者には、老人の底ぶかい執念が、自分の胸底に民族の魂をよみがえらせるようにはたらかかけたであらうし、またそのあわれさをわが身につまされてうけとめ、さらには民族としての悲しみにまでたかめることができたのではなからうか。

この宋老人の像は、のちの作品「寧越令監」（三九年）の朴大夏にほとんどそのままうけつがれている。朴老人は宋老人より、もっと凄絶な人生をおくる。わかたくして寧越の郡守までつとめたが「不正の時代に勢威を張るのは小人雑輩のみだ」として籠居する。しかし「己末年の事件」、つまり一九一九（大正八）年の三・一独立運動に参加して獄中生活四、五年を体験し、そのち田を売り屋敷を抵当にいれ、放浪の旅にでて消息を絶つこと十五、六年、飄然と甥の成翼の家にあらわれる。金の無心のためだが、使途についてはあらかじめ質問を封ずる。そしてまた旅にでるにあたって甥が庭石の蒐集をしているのを見て、なじるようにいう。

「……しかしわしはこんな処士趣味には反対じゃ」「殊に若いものが……われ／＼東洋人は、特にわれ／＼朝鮮人はどうも自然に

遣り過ぎて不可ん」「自然に還るべきは西洋人たちだ。わしは反対する、文明に、都会地に、われは歴史の作られて行く方向へ進んで行かなければならぬ……」

朴老人の、甥の庭石趣味にことよせたこの主張のなかに、民族の退嬰的な傾向への批判がふくまれていることはあきらかであるが、さらに民族の歴史的現実にもっと密着して考え、行動すべきだというのが真意であり、それは甥への空念仏的な説教なのではなくて、かれ自身のいままでの生活そのものを暗にものがたっているといふのであろう。じつは、かれは金鉞さがしにあげられていたのである。金の無心もその費用の調達であつたのだが、世間ふつうの拜金亡者ではない。鉞山で怪我をして入院に保証人がいるところから、ふたたび成翼と連絡がつき、かれのいままでの行状があらわになるのだが、なぜ金鉞なぞやるのかという甥の不審にこたえて、かれは心境の一端をもちこたす。「金に勝る力はない」「金力は物力だけでなく精神力までも左右する」という持説を強調するのに、李氏朝鮮打倒の動乱の指導者・洪景来をひきあいにだして、かれでも「黄金をばら撒いたではないか」というのを聞けば、朴老人の金鉞さがしという異様な行動が、私欲のためでないことは、ほぼ推察がつく。さらに「朝鮮の土の中には金が無尽蔵じゃ」「力なくては動くことも叶わぬ。金ほどの力はない」「金を金らしくも使えぬ輩がなんと

大勢金を堀り出しているではないか。大地が泣いておるじやろ、大地が……」というにいたって、老人の胸にひそむ念願が、朝鮮の「大地が泣」かない金の使途——民族解放にむすびついていることをよみとらないわけにはいかないだろう。しかしさすがのかれも病床にあつては高齢のなげきをどうすることもできず、甥が三十二歳であることを知ると「三十二？ 虎のような時じゃ。なぜみんなじつとしとる」と若い世代にもどかしさを感じて、叱咤もしたくなるのだ。ついにかれは敗血症をおこして危篤におちいる。甥はこの叔父のいま試掘している鉞山がたいして有望でないことを知り、ある鉞山事務所にあつたノタヂ（金塊）を買ってかえり、臨終の朴老人ににぎらせる。「これはノタヂではないか」、そして最後に「おお、おお」といふ、意味にならない、しかし意味のふかい叫びをのこして死んでゆく。後半生をかけて民族の魂を生きたために山野を駆けめぐつた果て、甥の好意によるいつわりともしらずに、思いをとげたと信じたときが、おのが生命のおわるときであつたという、このいたましい生涯の終末は、甥の成翼に民族の魂をよみがえらせる力があつたようだ。死んだ朴の長男、鳳翼と火葬場からの帰途、バスのなかで話をかわす。

「君はいくつだったかね？」

「兄さんより僕は二つ下だよ」

成翼は眼をつぶり、バスの動揺に身を任せながら呟いた。

「三十、三十二！虎のような……」

ここには「不遇先生」とのあきらかな相違をみる事ができる。宋老人の生涯が李青年の魂をゆりうごかすところまではいっていないのにたいして、朴老人は成翼の心の底に、やがて焰となるにちがいない火だねをおとしたといえるし、また宋老人が新聞発行を志しながら資金については他力本願であったのに、朴老人はみずからの手でそれをつくろうとして生命をおとす結果になっている。しかも書かれた時期は、後者がいっそう緊迫した困難な状態であったことに注目しておきたい。

一九三七（昭和十二）年に書いた「福德房」と四〇年の「夜道」とは、李泰俊のもう一つの側面をうきあがらせている。

「福德房」に登場する三人の老人のうち、安老人はかつて初試、朴老人は令監という役人であったし、徐老人はもと武官であったが、いまはいずれも志をえず、徐の経営する家屋売買仲介所である福德房にふきよせられるようにあつまってきたては口論したり、酒のみあつたりしている仲であるが、みなうらぶれていることにかわりはない。安老人は「いつかは一度自分にも運が向いて来て、もとのように自分の家作に住い自分の飯を食い、自分の力と自分の顔で世の中が歩けるもの」と、はかない夢をみることで、どうにか誇り

をたもとうとするが、舞踊家である娘にも相手にされず、わずかにあたえられる小遣い銭にすがって生きていくような境涯である。徐老人は「合併後五年もの間ぶらぶらしながら時の到るのを待っていたが、いい目が出そうもなく、諦めて」いまの商売をはじめたのだが、「兵を練る時の号令一下、山をも抜かんず昔日の感慨」はもはやうしなわれている。たまたま屑買いをしている、かつての同僚武官・金をみても、むしろかれにくらべれば、自分のほうが甲斐性があるとおもうくらいだ。朴喜完老人は代書業になりたくて総督府編纂の速修国語読本を勉強しているが、いっこうに支配者のことばに熟達しない。

ここにてでくる老人たちには、宋老人や朴大夏老人にみられた民族の良心を生きようとする一徹な気魄はなく、その日その日において世の中の動くままに吹きながされていくような、たよりないわびしさがただよっている。それもまさしく民族のかなしい現実の姿だが、そういう自分に反発する力ももうしいはてしているところに、二重の悲しさがある。街を歩いても安老人の暮しとはなんのかかわりもない「高層建築や絵のような文化住宅が殖えて行く」だけだし、自動車の警笛におどろいてふりかえると、車の座席には「金鎖を光らせて太った中年の紳士がにこにこ笑いながら坐って」て、かれは、いっそうみじめになるばかりである。その安老人に運がむ

いてきたとおもわせる事件がもちあがる。朴老人が、東海岸の羅津のような港が西海岸にもつくられるという秘密情報をもたらし、いまが土地の買いどきだとすすめる。安老人はようやく娘を口説いて三千元をださせ、予定地を買った。が、それは「官辺の某有力者」に一杯くわされたのだった。築港予定地をおもわく買いついて、その計画が変更になったために、有力者が自分の損害をつぐなうために朴老人を欺き、安老人から三千元をまきあげたのだ。真相を知った安老人は絶望のあまり自殺する。その葬式の時、酒に酔った徐老人と朴老人は「何か一言言えば胸が晴れそうだった」が、ついにことばにはならなかった。

この三人の、いかにもはかない夢をいだいて、その夢をきびしく拒否する現実のうちめされてゆく姿は、民族衰亡の運命を象徴しているといえるだろう。それとともに、その運命のゆきつくところ——安老人の死とふかくむすびついている「官辺の某有力者」に、植民地支配者としての日本人の狡猾な姿をよみとれば、この老人たちの悲惨さは典型的な形象をもって成立する。植民地被害者としての明確な自覚をもたないために、いっそう悲惨であるが、作者はその悲惨の由来する根源をみつめ、同胞の悲しい生活と心情を内側から、激情をおさえた描写でとらえている。

「夜道」（四〇年）になると、描かれる生活はいっそう凄惨さをく

わえてくる。京城に妻子をのこして仁川の建築現場に荷運びとして出稼ぎにきている黄は、ふりつづく雨のために仕事にあぶれ、そのため収入もとだえ、しおくりもできずにいる。そこへ突然「パナマに、金縁眼鏡を掛けた肥り気味の洋服姿の男」があらわれて、いきなりかれを殴る。その男は、京城で無理に下女として妻を、ついでに子どももいっしょに預ってもらっていた旦那だった。化粧にばかり浮身をやつしていたその妻が子どもたちをおきざりにして逃げたというのだ。子どもたちは駅までつれてきているから、すぐにひきとれという。黄は女の子ふたりと三カ月たらずの男の赤ん坊を建築中の現場にひきとったものの、さっそくその晩から赤ん坊は危篤におちいる。医者もみはなしてしまうと、荷運び仲間の権は、まだ完成もしない家から死人をだしたのでは家主に気の毒だという。黄はいったんは激怒するが、考えてみればそのとおりだとおもい、黄が赤ん坊をだき、権がシャベルをもって、ふりしきる雨の夜道にさまよいでる。こと切れたら、その場で埋めようというわけだ。やがてその時がきた。権が穴をほるのを黄は手伝った。「鑿で三尺ほどの深さになった。深くなるほど水は溜った。勾配になっていたので低い方へ筋をつけた。水はどくどくと音を立てながら見る間に引いてしまった」。「自分の手で自分の子の骸をこんな水溜りの中に埋める惨めさ」にうちのめされて慟哭する黄にかわって、赤ん坊をだきとる

うとした権は、まだ赤ん坊がなにか吐くのに気づいて愕然とする。まだ生きていたのだ。

三度目に覗き込んだ時は子供は間違いないく死んでいるようだった。もう一度穴の中の水を汲み出した。席の一方の端を下に敷き、子供を寝かせてから、もう一方の端で覆い、土をかぶせた。

黄は雨のなかにつつたつたまま、

「俺あどうしたってあの女を探し出して、同じ穴の中にぶちこんでやるんだ……」

「ウフ……このままで生きていたって何になるんだ？ 人の親なんて柄でもねえや。あれの恨みあ誰が晴してくれるんだ……あの女の乳のあたりを、ざくつと斬り取って埋めてやるんだ……」

といまにも駈けだしそうに叫ぶが、権にあとの女の子ふたりのことをいわれると、力なくくずおれてしまう。

この作品では、「福德房」よりも、さらに救いのない貧困と無力のどん底の世界が描かれている。全篇をおおう陰鬱な夜雨に象徴される黄の境涯と心情は、ぬきさしならぬやりにきれなさのために、読むものに一種たえがたい焦燥と憤りをかんじさせる。とくに子どもを水のためる穴に葬らねばならぬ場面は、巻をおおうて眼をそむけたくなる、しかしそれをゆるさぬ迫力が読者をとらえてはなさない。なほほど救いのない、脱出の方向もみつからない現実を、そのまま描写

したということを重視すれば「李泰俊の自然主義的な古さと弱さとがみえないわけではない」といえるかもしれない。が、自然主義文学のもつ一般的な限界に力点をおいてこの作品を評価したのでは、重要な一面を看過することにならないだろうか。この作品がおさえた現実が読者に回避することを許さない拘束力をもっていることを意味する。そういう質の文学的感動である。そのことは、いやおうなくこの現実直面し、その現実のもつ重さを読者が文学以後においてもせおわねばならぬ関係を作品とのあいだにもつことになる。読者にたいしてそのような機能をもつ文学は、ことに戦時下の朝鮮民族にとって、限界論によって李泰俊の「古さと弱さ」を指摘すること以上に、重要な意義をもっていたといえるべきである。それは朝鮮民族にとって自己とそのおかれている状況にたいする痛烈な認識をしいる文学的機能をもっているからである。

かれの文学は、「日韓併合」いらいの朝鮮民族のおもくるしい現実に眼がそそがれ、それがもたらす苦悩や憤激を、ありのままの現実の断片にむすびつけて、いわゆる「自然主義的」に再現したのではない。かれの作家主体が民族の現実にしっかり根づきながら、なお一定の枠内での虚構の力をかりてありうるべき現実、ありうるは

ずの人間像を創造しているために、かれの民族にたいする意識や感情はけっしてあらあらしく表面化せず、作品ぜんたいの基調としてふかく沈潜する特徴をもつことになっている。巨視的にみて歴史事実の枠内での虚構という限界をもつことが、民族の現実にたいするかれのあらがいのよわさを意味するとうけとるのは、文学の問題として正しい把握ではあるまい。たしかにかれの文学は民族の深部にはらまれていた可能性をリアリティをもつ人間や行動——民族を固縛する条件を打破してゆく人間や行動——にまで形象化するにはいっただいいない。しかし、そういう積極的・前進的な人間や行動をつくりだそうとすることが、日帝支配に呻吟し無力感にとらわれている人民への唯一の有効なよびかけになるとばかりはかぎらないであろう。また積極的・前進的であろうとすることによって、しばしば民族の現実からかけはなれた人間や行動を觀念的に描く結果になるばあいもある。むしろ、かれのあらがいはその複雑さのゆえに、あるときは屈原の詩を愛誦する宋老人として、「青い眼精の妖しく光る」朴大夏として、またあるときは徐・朴・安の三老人や死児をいだいて雨中の夜道を彷徨する黄になるなど、現実にたいする多様な姿勢としてあらわれる。ここには、日本帝国主義の支配に抵抗するあきらかな意志をもつ人間像と、その支配のままに受動的に生きていく人間像とが、同時並行的に描き分けられているが、民族の現実

に密着しながら、そのなかの受動的人間像を否定的に造型したかれの文学の方法は、軽視されてはならないであろう。

李泰俊文学の焦点は、朴大夏や安老人や黄の赤ん坊などの死や、宋の行方さだめぬ放浪を描出することにあつたとおもう。それらはいずれも、日帝支配の結果としてもたらされたものにはかならないからである。死か放浪かというのは、民族のきびしい現実のなかにおいてみたとき、その繫縛から積極的に解放される方向ではないという意味で、たしかに消極的で無力であるといえる。しかし、死か放浪かのいずれかしか選ぶ道のなかつた多数の朝鮮人にとって、その死や放浪の悲惨さは適確に身をもって共感できたはずである。あの土地調査事業の結果、おびただしい流浪貧民や火田民がでた一事を想起するだけでも、そのことは推察される。そういう朝鮮人の現実を前提として考えると、かれらの眼に、その死や放浪がたんに消極的で無力なものとしてうつるのではなくて、消極的で無力であればあるほど、そういう生き方を強制するものへの感情がいっそうよく誘発されたにちがいない。読者のその怒りの激情のなかに李泰俊文学のたたかひがひそんでいたといわねばならぬ。まして一九三九（昭和十四）年「朝鮮の文学者たちによって内鮮一体の文章報国をめざす朝鮮文人協会が設立され、会員約二百五十名に達した」⁴⁰という風潮が支配的な時点で、このような作品を創造しえた李泰俊

は、その基本的な作家姿勢において評価されねばならないとおもう。

④ 昭和十六年モダン日本社から鄭人沢の日本語訳で出版、戦後は東方社「現代朝鮮文学選書」の一冊として刊行されている。

⑤ 和泉あき編「戦争下の文化・文学関係統制とその反応」(「文学」昭和三十三年四月号)

⑥ 金逢寿「解説」(東方社「福徳房」所収)二八〇頁。

⑦ 前注におなじ。二八一頁。

⑧ 張斗植「ある在日朝鮮人の記録」(同成社)四頁。朴慶植「朝鮮人強制連行の記録」(未来社)二〇頁。

⑨ 注⑤におなじ。

5

金史良は、李泰俊よりさらに十歳わかかく一九一四年うまれの作家であるが、一九四〇(昭和十五)年を中心に作品を集中的に発表しているから、作家活動としては李泰俊とかさなりあいながら、ややあとにずれている。

かれは、日本語で書いた一九三九年の「光の中に」が芥川賞候補作品になったことから、日本文壇の一部の注目をあつめた。日朝混血

の少年山田春雄と朝鮮人大学生・南との交渉を中心に、朝鮮人蔑視と迫害の日本の社会環境のなかで、おたがいに民族の血をそれとしてみとめあうことを恐れる感情の交錯から作品がはじまる。江東ちかくの工場街にあるS協会は「帝大学生が中心となっている一つの隣保事業の団体」であり、托児部・子供部・市民教育部・購読組合・無料医療部などにわかれて活動していて、南はミナミ先生とよばれて英語を教えている。その南の正体をみやぶっているのが山田春雄である。

私の苗字は御存じのように南なんと読むべきであるが、いろいろな理由で日本名風と呼ばれていた。私の同僚たちが先ずそういう風に私を呼んでくれた。私をはじめはそんな呼び方が非常に気にかかった。だが後から私はやはりこういう無邪気な子供たちと遊ぶためには、却ってその方がいいかもしれないと考えた。それ故に私は偽善をはる訳でもなく又卑屈である所以でもないと自分に何度もうい聞かせた。そして云うまでもなくこの子供部の中に朝鮮の子供でもいたならば、私は強いてでも自分を南なんと呼ぶように主張したのであると自ら弁明もしていた。

こういう南の自己弁護的にたまたまれていた態度は、自動車の運転助手をしているわかい李によって「どうして先生のような人でさえ苗字を隠そうとするのです」「私はそんな必要を認めないのです。私

はひがみたくもなければ、又卑屈な真似もしたくないのです」とはげしく詰問される。南としては子どもを理由にした弁解しかない。

「そう、先生は朝鮮人だぞう！」立ち聞きしていた山田春雄は子どもたちのあいだをふれまわる。このときくらい、春雄は南に「やい朝鮮人！」といった舌をだすような、いやがらせをつづける。

南は春雄の貧しい一家が朝鮮に移住していた時期があつて、そのとき「つむじ曲りの優越感」を身につけさせられて帰ってきたのだろうと想像していた。ところが、貞順という朝鮮婦人が怪我をさせられて協会の医療部にかつきこまれたことから、その貞順が春雄の母であり、かの女に怪我をさせた監獄がえりの夫・半兵衛、つまり春雄の父も日朝混血であることが南にも判明してくる。

本能的な母親に対する愛情にしろ、どうしてこの少年にだけ缺けていると考えていいのだろうか。それはただ歪められたのに過ぎないのだ。私は近所の人々からいためつけられ擯斥されている一人の同族の婦を想像した。そして日本人の血と朝鮮人の血を享けた一人の少年の中における、調和されない二元的なものの分裂の悲劇を考えた。「父のもの」に対する無条件の献身と「母のもの」に対する盲目的な背拒、その二つがいつも相剋しているのである。殊に身を貧苦の巷に埋めている彼であつて見れば、素直に母の愛情の世界へひたり込むことをさし止められたに違いな

い。彼はおおつびらに母に抱き附くことが出来ない。だが「母のもの」に対する盲目的な背拒においても、やはり母に対する温い息吹はひしめいていたのであろう。

春雄の背景がわかり、それにもとづいて春雄のいままでの行動と心理が、ようやく南にも理解できるようになる。自分のなかに朝鮮人の血がながれていることを知りながら、それをうべなうことのできない苦悩が春雄をとらえているのだ。

彼が朝鮮人を見れば殆ど衝動的に大きな声で朝鮮人朝鮮人と云わずにはおれなかつた気持を、私はおぼろげながらに理解出来ないでもない。だが彼は私を見た最初の瞬間から朝鮮人ではあるまいかと疑いの念を抱きながらも、終始私につきまといつていたではないか。それは確かに私への愛情であらう。「母のもの」に対する無意識ながらの懐しさであらう。そしてそれは私を通しての母への愛の一つの歪められた表現に違いない。

ここに南は、春雄のなかの「父のもの」への「無条件の献身」と「母のもの」への「盲目的な背拒」とをみるだけでなく、その「母のもの」への「背拒」の底に、「母への愛」の潜在をみることで、春雄にたいする理解と愛情をふかめるにいたつた。ほんとうは南のすぐ傍によりそおうとしている春雄の悲しい心情をよみとることができたのである。と同時に「現在は南と^{みなみ}呼ばれていることがじーんと

電話のように五管の中へ鳴り響いて来るのを感じ」ねばならなかった。「偽善者奴」「卑屈になって来ている」という自己反省がいやうなく南をとらえる。そのかれが貞順を病院にみまわったとき「私、南なんと申します」こみずから朝鮮人として名のり、同族として慰めようとするが、かの女はかたくなに「お願い……します。どうか妾の春雄の……相手をしないで……下さいませ」「春雄は日本人です」といつてかれの好意を拒否しようとする。「日本人と結婚していることを一種の誇りと思つて、この逆境を生きてゆくせめてもの慰めとしてゐるのかも知れない」と貞順の心を推測した南は暗然と病室を去ろうとするが、そのとき、あれほど貞順を母親としてみとめようとせず、ましてみまおうともしなかつた春雄が病院に訪れてくるのに会つて感動する。

南と春雄はつれだつて上野動物園へでかける。「僕、舞踊家になるんだよ」という春雄のことは、さらに南の心をあかるくする。私の目の前には、この異常な生れをもつ、傷めつけられ歪められて来た一人の少年が、舞台の上で脚を張り腕をのばして渡り合う赤や青の様々な光を追いながら光の中に踊りまぐる像がちらついで見えた。私の全身は瑞々しい喜びと感激にあふれて来るのを感じた。彼も満足そうに微笑を浮かべながら私を見守つた。……………

「先生、僕は先生の名前を知つてゐるよう」

「そうか」私はてれかくしに笑つて見せた。「云つてごらん」
「南先生なんでしよう？」そう云つたかと思つたと彼は私の手に自分の脇にかかえていた上服を投げ付けて嬉々としながら石段をひとり駆け下りて行くのだった。

私もほつと救われたような軽い足取りで倒れそうになりながら、たたたつと彼の後を追うて下りて行つた。

金史良がこの作品に描きだした南・山田春雄・貞順は、いずれも朝鮮民族の血をうけながら、李青年のようにそれを昂然とみとめることができず、程度のちがいはあるけれども、植民地的人間としての卑屈な陰影をせおつている。日本人から朝鮮人として軽蔑され差別される現実が、かれらの心に歪みをあたえ、民族の誇りをうばい、そういう現実にあ協するしか生きるすべを知らなくさせる。南はミナミとよばれることを教育相手である子どもたちの心理を理由に正当化し、貞順は春雄を「妾の子ではありません」と強弁し、春雄は朝鮮人である母親を拒否する。そこには被支配の現実に屈服した人間のおわれぬ姿がみじめにもあざやかに描写されている。しかし、その三人がみずから自己の血をみとめ、とくに春雄少年が「光の中に」乱舞する姿を夢想することができるところまで、いわば暗闇の世界ともいふべき民族喪失の場所から、民族がそれとして生きることのできる「光の中に」まで、とにかく脱けてでくる経緯が、ずっしり

とした重みをもってみごとに形象化されている。しかも、この作品が日本の支配者によって「創氏改名」政策がうちだされた年に書かれたという事実は、そこに日本帝国主義にたいする昂然とした作者の姿勢をうかびあがらせてくる。金史良が、この種の人間像を、もっと破綻をきたした姿として「天馬」（四〇年）の小説家・玄龍にも描きだしているのをみれば、かれの文学的関心のひとつが、同族の植民地的人間化の現実にもつけられていたと推測してもよいであろう。かれ自身「光の中に」について「止むに止まれぬ気持に追はれるやうにして書いた」といい、「天馬」についても「書いたというより、寧ろ書かせられたやうな気がする」といつているのを見ても、同族の奴隸化されてゆく姿は、かれの心をおもくろしくとらえ、しかも回避することを許さぬ現実としてたちはだかっていたといえるだろう。それは李泰俊の「福德房」の三老人や「夜道」の黄よりも、さらに深刻に日本帝国主義の軛にしめあげられている姿であり、朝鮮民族としてはいっそう奴隸化現象の進行した姿でもある。それだけに金史良は、李泰俊よりもいっそう耐えがたい民族解体の現実にも身を置き、文学にたちむかったといわねばならない。しかも「天馬」が「この日本人を救ってくれ」「もう僕は鮮人じゃねえ！」という玄龍の悲惨な絶叫によっておわる結末であるのにたいして、「光の中に」は、民族を自己のなかによみがえらせることのできた

さわやかな歓喜にあふれているというちがいがあつた。したがって、民族が民族として存立しうるかどうかの瀬戸際に身をおいた金史良は、いっぽうでは奴隸化されようとしている朝鮮人がわずかに民族とのつながりを回復し、それを保持してゆく可能性を、また他方では、その可能性すらうしなわれたきびしい現実を、描きわけていることになる。

「無窮一家」（四〇年）は、「内地における朝鮮移住民の苦難の生活を朝鮮内の同胞に伝へようといふ気持から描いた」とみずから語っているように、在日朝鮮人の経済的窮迫の状況と、そのなかにおける人間関係が克明に描かれている作品である。自動車運転手をしながら、このままではおわりたくないとおもっている崔東成、「新思想を学ぶんじやと住友の夫婦募集に応じて飛び渡って来たのが、そもそも身を滅はす間違いのもの」となった東成の父、電気もとめられているような東成の狭い家に居候をしているのに、映画にははてぬ夢をかけている姜明善夫婦とその弟、同胞をふみにじることので巨万の富をきずいた尹千寿など、これらの群像がおりなす生活図は、同族が助けあう反面、利用し食いのにし、尹千寿をのぞけば確実に窮乏してゆく陰惨な生活苦の様相が描出されている。東成はエンジニヤになって父母をつれて朝鮮へ帰る希望をもっていた。しかし「綺麗事の学問を続けるということが、自分にはいかに空想に過ぎ

なかつたかを知り」「惨めにも敗北の姿となりかわるよう」な自分の現状を悲しむ。

東の国へ一旦渡つて来たからには、せめてお前でも成功せよというので、東成という名前を父は附けたと云う。東成、東成と彼は氣でもふれたように呟いてみた。それと同時にむらむらと彼はどこと云つて当てどのない憎しみを全身に覚えた。裸一貫の自分の体を広い苦海の中に投げ捨てた父や母も憎くなる。どうして俺をこゝろも寄つてたかつて苦しめようとするのだ！

東成ひとりの肩に両親はじめ姜一家の生活までのしかかっている。

「事変以後は東成の方の収入も益々減つて行く」のでは、はじめは善意から姜一家につくした親切であつたのが、ついとげとげしい空氣にかわつてゆく。姜明善は従兄にだまされ、すげなくされて金策のあてを失い、鉱夫採用のピラにつられて、身重の妻を東成の家に置きざりにしたまま無断で北海道へわたり、姜の弟も東成の父と争つて土工の飯場へうつる。「背伸びして立ち上ろう、立ち上ろうとする時、少くとも自分達はそう力む程、益々深く泥濘の中に足を取られるばかりではないか」と絶望的になつていた東成だつたが、姜の妻がいよいよ出産するとなると、連絡にいつた飯場の朝鮮人たちが、東成一家の窮乏をいたわりながら、しかも、こぞつてよろこんでくれるのをみて感動する。

自分一人だけがどん底の中でもがいているのではない。俺達は皆が一人残らず同じように苦しんでいる。そしてそれは俺達各々の人に連なつてゐる苦しみであり、又それを突き抜けて進もうとする悩みも勇氣も懼れも闘いも凡ての人のものなのだ。こうして俺達は今まで生きて来たし、これからも又窮りない苦しみと悦びの中で永遠に生きるに違ひない。

あたらしい生命の誕生がきっかけとなつて、同族の連帯を東成は確認し、ひいてはかれの内部にふたたび生きぬこうとする「強靱な精神をよび戻した」のであつた。

金史良は、どん底に追いこまれた在日朝鮮人の苦しい生活と人間關係をとらえ、いっぽう同胞の苦境などいさゝか無視して私利のみをはかる尹千寿や姜の従兄などを点出しながら、窮迫のなかにうしなわれていない同族連帯の美しさをとらえた。ここには日本人による差別・搾取は直接的にはとりあげられていない。が、貧乏ゆえの家庭内の不和、あるいは朝鮮人相互の歪んだ關係、そういうところからひきおこされる「どこと云つて当てどのない憎しみ」など、これらのすべてがなにに起因しているかは、朝鮮人にとつて語らずとも自明のことであつたにちがいない。そもそも故国を遠くはなれ、言語も慣習もちがう異国日本へなにゆえに渡航してこなければならなかつたか、そこで待ちうけていたのが、どんな生活であつたか

は、明治末期以来、民族的体験として肌身にきざみこまれてきていたはずだからである。しかし、支配される民族が、みずからの「民族」を放棄することによってしか生きのびる道のないところまで追いつめられてきた実態を金史良は凝視しつづけ、しかも民族の根源の力に信頼をよせ、絶望的な状況のなかで絶望しない魂の灯をもやしつづけている。かれにとつて文学とは、民族の絶望的状况をリアルにとらえるだけでなく、その状況を打破しようとするたたかひの場であったといわねばならない。かれには、みずから「滅ぶものへの哀愁」⁵⁴とよぶ朝鮮を舞台として朝鮮人を描いた「土城廓」「箕子林」などの作品があり、さらには「草深し」「いづれも四〇年」などもあるけれども、「光の中に」「無窮一家」あるいは「親分コブセ」(四二年)などのように、在日朝鮮人の生活に取材し、そこに民族の未来の可能性を発見しようとした作品に、かれの文学のすぐれた特徴をみたい。そして日本に支配されることによって強制される人間的、生活的破綻に耐え、あるいは耐えかねている同胞の呻吟する姿から眼をそらさず、さらに朝鮮民族を自己のなから喪失して日本帝国主義に奉仕する奴隷と化した同胞の存在もみのがさず、しかもなお自覺的な階級意識にまではいっていないが、その意識をはぐくみそだてるものとしての同胞連帯の美しさのなかに、「永遠に生きる」民族の未来を確信できる世界を創造した。そこにかれの文学のおおき

な価値があるといふべきであろう。

金史良はつぎの一文をのこしている。

各々の作品の内容を考へてみれば、現実の重苦に押され、私の目は未だに暗い所にしか注がれてゐないやうである。だが、私の心はいつも明暗の中を泳ぎ、肯定と否定の間を縫ひながら、いつもほのぼのとした光を求めようと齟齬してゐる。光の中に早く出て行きたい。それは私の希望でもある。だが光を拝むために、私は或はまだ闇の中に体をちぢかめて目を光らしてゐねばならないのかも知れない。⁵⁵

これには、かれのこのころの秘密が語られている。朝鮮民族の被支配者としての実態のなかにあつて、民族の運命をあるときは「明」として、またべつときは「暗」としてとらえざるをえないさまじまな事象にであひ、それを「肯定」し、あるいは「否定」するといふ、ゆれうごいてゐるかれの民族にたいする精神の状態は、たしかにかれの作品に反映している。その振幅のなかで、かれがめざしてゐるのは「ほのぼのとした光」であるが、それはつまり、かれにとつて民族解放の実現にほかなるまい。しかも、その「光の中に」民族がでてゆける日の到来をまぢのぞみながら、「目を光らして」かがみているものはなにか。それは民族に「闇」をもたらししている

ものちがいないだろう。この文章は昭和十五年という時代状況からいっても、とうぜん抑制された表現になっているが、日本帝国主義の朝鮮民族にくわえている圧制・搾取・差別をかれがみのがしていないことを、最後のセンチメンスによみとることができる。と同時に、民族の解放を実現するための不屈で強靱なたたかひの精神が、鬱屈としてたたえられているのもみのがすわけにはゆかないのだ。

かれは、すでにふれたように、貧民のなかになりたつ連帯を、とくにそれも若い世代の連帯を、民族の根源的な力として支配民族のなかの被支配民族という困難なシチュエーションのなかに創造することができた。その連帯にこそかれは民族の未来をたくしたといえる。李泰俊は、老人が若い世代に期待するところまでは描いたが、金史良はさらにその若い世代を民族本来の姿にむかって、ゆりうごかしてやまない力としての連帯関係を感動的につくりあげることができた。金史良のリアリズムが李泰俊のそれより一步ぬきんでいてたことを認めないわけにはゆかない。

- ⑤① 戦時中「光の中に」（小山書店）「故郷」（甲鳥書林）の二冊が出版され、戦後「金史良作品集」（理論社）一冊がある。ちなみに、金史良は旧制佐賀高校をへて東大独文科をでた。かれの経歴その他については金達寿の「金史良・人と作品」（「金史良作品集」所収）に詳しい。

- ⑤② 金史良「あとがき」（小山書店・昭和十五年版「光の中に」所収）三四六頁。

- ⑤③ 前注におなじ。三四七頁。

- ⑤④ 前注におなじ。三四六頁。

- ⑤⑤ 前注におなじ。三四七頁。

6

韓雪野・李泰俊・金史良らは、日本帝国主義の支配下において、朝鮮民族の自由と解放をもとめるたたかひを、それぞれ個性のある文学の執拗な創造をとおして展開した。かれらがみずから思考できる年齢に達したときは、すでにかれらの祖国は日本に占領され、民族は支配者の奴隸「皇国臣民」となる道があるきはじめていた。そういう民族の運命のなかで自己を形成してきたこれらの作家たちが、文学という、もっとも根源的に人間を問ういとなみのなかで、あくまでその人間を民族と結合してしかとらえなかったということは一見、とうぜんのことのようでありながら、じつは困難な課題であったのだといわねばならない。日本帝国主義がそのきびしい検閲をとおしてもっとも警戒したのがほかならぬその「民族」、つまり、朝鮮民族の日本からの独立を讀者に志向させる可能性をもつ作品であったという条件と、文学者として人間を問題にするかぎり、

それはかならずしも「民族」をもちこまなくても文学でありえたという条件とのふたつの問題、じつはふたつの陥穽があったからである。それにもかかわらず、かれらは頑強に自己の民族に固執した。

言語と文字をうばわれる最悪の事態にいたつても、なお屈服せず、たとえば金史良のように日本語で作品を書き、それが不可能になると延安へ脱出して「太平洋戦争中に書かれた朝鮮文学のうちの、真正なものの一つ」^⑤といわれる朝鮮語による戯曲「胡蝶」をのこすことができている。この執拗さの根源を朝鮮民族固有のねばりづよい性質にもとめることもできようが、やはりカップiraいの文学伝統が形成してきた文学観と文学の方法によるところがおおきいといふべきであろう。民族のおかれている状況にたいするただしい認識があり、その民族の現実には媒介され、それをおしてしか人間を文学の対象として意識することができなかった、民族をはなれた一般的・抽象的人間はかれらの価値意識にのぼりえなかつたという事情を看過すべきではあるまい。ここに芸術を「無産階級運動の一部門」と規定したカップの思想が、日本帝国主義の桎梏が強化されるにつれて、その公式性を克服しながら、民族解放の思想と結合され、その民族的課題にこたえようとする文学の姿勢と方法の深化をもたらした経過をみることができる。日本帝国主義と文学によってたかたか、その検閲と文学においてたかたか、その二重のたかたかが、

カップiraいの伝統を、いっそうゆたかな、ふかめられたものとして継承発展させることになった歴史の皮肉を、ここにみないわけにはゆかない。戦後の金達寿の「後裔の街」「玄海灘」なども、これら先人たちの形成してきた文学伝統がなかつたならば、あらわれなかつたであろう。

⑤ 金達寿「太平洋戦争下の朝鮮文学」〔文学〕昭和三十六年八月号）